

# 『待賢門院堀河集』注釈(六)

加藤 睦

松本真奈美

○本稿は宮内庁書陵部蔵『待賢門院堀河集』(五〇一・五七)を底本とし、その一〇六番歌から一二一番歌までの本文を掲げ、注釈を施したものである。凡例については、『立教大学 日本文学』第一〇一号所載の『待賢門院堀河集』注釈(一)を参照されたい。

○本注釈における和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に、散文の引用は『新編日本古典文学全集』によった。ただし『今鏡』の引用は『新訂増補国史大系』に、『梁塵秘抄』の引用は『日本古典文学大系』による。いずれの場合も引用に際して適宜表記を改めた。

なき名

一〇六 すぐべきかたもなき名ぞおひにける水田の水うちもとけぬ

【校異】○おひにける―底本「をいわける」。「おひにけり」(松)、「老にける」(群)により校訂 ○みつたのこほり―みつたのおひ(群)

【現代語訳】あらぬ噂

消し去るすべもない、あらぬ恋の噂が生じてしまったよ。まだあの人が心を許してくれてもいないのに。

【語釈】○なき名 無き名。ここでは、事実無根の恋の噂。『古今和歌六帖』第五の項目に「なき名」がある。また『散木奇歌集』(一一三〇)に「なき名たつ」題の恋歌がある。和歌ではしばしば「春の野におふるなきなのわびしきは身をつみてだに人の知らぬよ」(拾遺集・恋二・六九八・読人不知)のように「名」に「菜」を掛けて用いられる。当該歌においても同様。○すぐ ①水で物の汚れを落とす意、②汚名や不名誉などを除き去る意などを表す語。ここでは、「菜」との関係で①の意を、「無き名」との関係で②の意を、それぞれ表している。↓【補説】。○おひにける 「生ふ」は植物などが生育する意を表す。ここでは「菜」を主語として「菜が」生える「意を、「無き名」を主語として「事実無根の恋の噂が生じる」意を表している。○水田の水 水を引き入れた田の水。和歌では「小山田の水田の水うちとけて今朝はかはづもゆるに鳴くなり」(源賢法眼集・一)が早い例。当該歌では、「菜」が「生ふ」る場所を示すとともに、心を許してくれない相手の女性をたとえている。○うちもとけぬに 「うちとく」は、①氷などがとける、②くつろぐ、③(主に異性と)の交際で心を許す・馴れ親しむ、などの意を表す。ここでは、「水田の水」を主語として①

の意を、詠歌主体が思いを寄せている相手の女性を主語として③の意を、それぞれ表している。参考「はじめて女のもとに春立つ日つかはしける／年へつる山下水の薄氷けふ春風にうちもとけなん」(後拾遺集・恋一・六二三・藤原能通)。

【補説】まだ相手が心を許してもいないのに、恋の噂が立ってしまったことを嘆く男性の立場からの歌である。「すすべ」「生ひ」「水田」と、「菜」に縁のあることばを連ねて一首を構成している。類似の先行歌に「すすべきかたなきものは春の野にわがつむならぬなきなりけり」(嘉言集・二九／統詞花集・雑中・八〇二)がある。

たのむる

一〇七 いつはりにならはざりせば行末とたのむることになぐさみなまし

【校異】○集付―續拾(群) ○ならはざりせば―底本「ならいさりせは」。「ならはざりせは」(松・群)により校訂 ○行すゑと―行すゑの(松)、行末と(群)

【現代語訳】あてにさせる

もし男の偽りに慣れていなかっただらば「いつまでも心変わりはない」とあの人があてにさせることに、心は慰められるであろうに。

【他出】

○『統拾遺集』恋三・九〇九

(題しらず)

待賢門院堀川

いつはりにならはざりせば行すゑもたのむることになぐさみなまし

【語釈】○たのむる 相手に約束したり誓ったりすることで、何かを期待させること。『古今和歌六帖』第五の項目に「たのむる」がある。

○いつはり うそ。ここでは、実現しなかった恋の誓い。○行末 将来ずっと(変わらずに愛し続ける)。相手の誓いのことば。参考「行末と契りしことは違ふともこのごろばかりとふ人もがな」(和泉式部集・七七五)。

【補説】女性の立場からの歌である。今までさんざん男性に裏切られてきたので、現在の恋人の誓いのことばを信じられず、心が慰められることはない、の意を、反実仮想の構文「……せば……まし」を用いて表現している。「いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし」(古今集・恋四・七二二・読人不知)を念頭に置いている。

なげ  
嘆く

一〇八 山びこのこたへだにせぬ嘆きにもこりずぞ斧のおどろかしつる

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】嘆く

あの人が返事さえもくれない嘆きにも懲りずに、また便りを送ったことだ。

【語釈】○山びこ 山の中などで生じる音の反響。 ○こたへだにせぬ 「こたへ」は、便りへの返事の意と、斧で木を伐る音が反響する意を表している。「よも山の山の山びこなければやわが呼ぶ声にこたへだにせぬ」（古今和歌六帖・山びこ・九九五）。 ○嘆き 悲嘆。「木」を掛ける。参考「嘆きをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくならぬべらなり」（古今集・誹諧歌・一〇五七・読人不知）。 ○こりぞ 考えを改めずに。「懲り」に「伐り」を掛ける。 ○おどろかしつる 「おどろかす」は、便りを送って関心を引く意と、斧で木を伐る音でびっくりさせる意を表している。

【補説】思う相手が文への返事もくれないために詠歌主体は嘆き悲しんでいるが、くじけずにまた便りを送った、という恋の境地を歌った、男性の立場からの歌である。「山彦」「答へ」「木」「伐り」「斧」「おどろかす」と、山に縁のあることばを連ねて一首を構成している。【語釈】に掲げた二首の他、「つれもなき人を恋ふとて山びこのこたへするまで嘆きつるかな」（古今集・恋一・五二一・読人不知）も参考になる。

なお大治元年（一一二六）八月に、藤原忠通が自邸で催した『撰政左大臣家歌合』における恋題の歌に、当該歌と酷似したものがある。

つれなしとかつは心を見山木のこりずも斧のおとづるるかな

（大治元年撰政左大臣家歌合・恋・二〇・堀河）

相手の冷淡さにも懲りずに便りを送るという内容や、下句の表現が当該歌とよく似ている。作者は「堀河」なる女房であるが、本集作者の待賢門院堀河とは別人であろう。高野瀬恵子氏「院政期女房歌人「堀

河」考」（『国文学研究資料巻紀要 文学研究篇』三十四号、二〇〇八年）の説かれる通り、『金葉集』に「前斎院六条（待賢門院堀河）」と区別されて「撰政家堀河」の名で一首が入集している歌人と同じ人物が、忠通家の女房「堀河」としてこの歌合に出詠したと見ておきたい。

なお、この「つれなしと」詠についての判者源俊頼の判詞は「次歌は、歌めいたり。いとをかし。但し、近曾しのびたる人の歌合に見しやうにおぼえ候へば、ひが事にや候ふらん。よみ合はせたらば、よし隠れの歌なりとて、おしてとりたらば、主や鼻むかんとおぼえ候ふかな」と記録されている。俊頼が「近曾しのびたる人の歌合」で見た記憶のある歌は、本集のこの「山びこの」詠であった可能性もあるだろうか。後考に候いたい。

いつしか人聞ききののしりければ、音こもせざりけるに、やらんとてこひしに

一〇九 あさましや人目めもりぬとことよせて絶たえ果はてぬるか山の井の水

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】「いつの間にか世間が（私たちの仲を）耳にして盛んに噂を立てたので、（私に）便りも寄こさなくなった男に、歌を送りたい」と（ある女が）歌を所望したので

あきれたことですわ。人目を気にして音信を控えていたのかこつて、そのまま私を捨てて訪れが絶えてしまったのですか、山の井の

水のように愛情の浅いあなたは。

【語釈】○いつしか いつの間にか。以下「やらん」まで、作者に歌を所望した女からの依頼の内容。○人聞きののしりければ 世間の人々が私たちの仲（代作を依頼した女と相手の男との仲）を耳にして盛んに噂を立てたので。○音もせざりけるに 便りも寄こさなくなつたその男に。○やらん 歌を送りたい。○こひしに ある女が歌を求めたので。相手の男に送る歌の代作を、作者堀河に依頼したのである。○あさましや あきれたことですわ。「あさまし」は、意外なことに興ざめに思い、不快であるの意。○人目もりぬ 世間の見る目を気にして、音信を控えていた。水の縁語「漏り」を掛ける。○ことよせて かこつけて。別のことを表向きの理由にして。○絶え果てぬるか 「絶え果つ」は、水がすっかり涸れる意と、訪れが完全に絶える意を表している。○山の井の水 山中の湧き水。「安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは」（古今集・仮名序）により、相手の男の浅い愛情をたとえる。

【補説】ある女性が男に送る歌を代わりに作ってほしいと作者に求めたために作った歌である。女性の恋人の男は、女性との仲が世間で噂になつたため、便りを寄こさなくなつた。ほとぼりがさめるまで音信は控える、などと言いながら、しばらく経つても音沙汰がなかつたのであろう。放つておかれたことを不満に思い、不安にも感じる依頼者の女性の立場から、男の不誠実さをなじる内容の歌である。【語釈】に引いた著名な「安積山」詠の他、「浅からんことをだにこそ恨みしか絶

えや果つべき山の井の水」（古今和歌六帖・山の井・九八九／続後撰集・恋五・九八九・藤原興風）も作者の念頭にあつたかもしれない。以後一一七番歌まで、他者から依頼されて詠じた代作歌が続く。

絶えにける男の、口惜しきことも人にいひなどするが、  
またおとづれたるに、やらんとて女こひしに

一一〇 うしとのみ秋の気色は聞くものをいかにおとする萩の葉風ぞ  
【校異】○女こひしに―女のかひしに（松）、こひしに（群） ○うしとのみ―底本「うらみのみ」。「うしとのみ」（松・群）により校訂 ○をきのは風そ―あきのけしきは（松）

【現代語訳】訪れが絶えてしまった男が、不本意なことなどを他人に話しなどしていたが、また便りを寄こしてきたので、（その男に）歌を送ろうということで、女が歌を所望したので

秋の景色は憂鬱だとばかり聞いているのに、どうして萩の葉風は音を立てて、私をさらに憂鬱にするのでしょうか―あなたが私についていろいろなことを言っているの、つくづくひどいと私は思っているのに、どうしてまた便りなど寄こして私を不快にさせるのでしょうか。

【語釈】○口惜しきことも 女性の悪口など、女性にとつて不本意なこと。○またおとづれたるに また音信を寄こしてきたので。○

秋の景色 「秋の風景」の意に「私に飽きたあなたの様子」の意を掛ける。なお、この語句を「萩」とともに詠み込んだ早い例に「郁芳門院の前裁合に萩をよめる／ものごとに秋の景色はしるけれどまづ身に

しむは萩の上風」(千載集・秋上・二三三・源行宗)がある。○萩の葉風 萩の葉をそよがせる風。その音は「秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならばおとはしてまし」(後撰集・恋四・八四六・中務)に基づき、男からの音信を連想させる。

【補説】自分を捨てて訪れなくなった男が、自分について、あることないこと周囲に言いふらしていたのに、その上図々しくもまた連絡を寄こしてきたので、不快に思った女性が抗議の歌を堀河に依頼した。その代作歌である。一首の意は、あなたがひどいことを言いふらしていると私は知っているのに、よく便りなんか寄こせたものですね、といったところである。秋の頃の詠作であろう。なお「うしとのみ」という初句は同時代の和歌に散見する。

うしとのみ人の心をみしま江の入江の真孤思ひみだれて

(堀河百首・恨・一二六五・藤原公実)

うしとのみ人の心はいはれ野にまねく薄をなにか頼まん

(西宮歌合・薄寄恋・二六・源頭仲)

作者堀河の父である頭仲の歌は、公実詠の影響歌と思われるが、当該歌と同様に秋の景物を詠み込んでいる。大治三年(一一二八)催行の『西宮歌合』は、頭仲が一門の歌人を集めて主催した歌合であったため、当該歌との関連が想定されようか。

文おこする人の、たえてまたおとづれたるに、いひはなち  
たらむうたと人のこひたるに

一一一 山の井の浅きころをし知りぬれば影見むことは思ひたえにき

【校異】○集付―玉葉(群) ○うた―底本「かた」。「うた」(松)、

「哥」(群)により校訂

【現代語訳】手紙を寄こしてくる人が、ひとたび音信が絶えてまた便りを寄こしたので、突き放すような言い方の歌を作ってほしい、と人が所望したので

山の井の浅い水のような、あなたの薄情な心をわかってしまったので、あなたの姿を見たいなどという気持ちはすっかりなくなっていました。

【他出】

○『玉葉集』恋三・一四九四

恋歌の中に

待賢門院堀川

山の井のあさき心をしりぬればかげみんことはおもひたえにき

【語釈】○文おこする人 手紙を寄こしてくる人。男性。○たえて

またおとづれたるに ひとたび音信が絶えたのに、その後また音信を

寄こしてきたので。○いひはなちたらむうた 「いひはなつ」は、

自分の意志を他者にはばからずに言う、突き放すように言うの意。○

人のこひたるに 人が所望したので。「人」は女性。堀河の友人である

う。○山の井 山中の湧き水。一首は著名歌「安積山影さへ見ゆる

山の井の浅くは人を思ふものは」(古今集・仮名序)に依拠する。○

浅きころ 薄情な心。薄い愛情。「浅き」は「山の井」の縁語。○

影人や物の姿。ここでは相手の男性の姿。「山の井」の縁語。○思

ひたえにき 「たえ」に「山の井」の縁語「絶え」を掛ける。

【補説】手紙を寄こしてきた男が、ひとたび連絡を絶つておいてまた連絡を寄こしてきた。不快に思った女性が、もう逢うつもりはないときっぱり伝える歌を堀河に依頼した、その代作歌である。一首の意は、あなたの愛情の薄さがよくわかつたので、今さら姿を見たいとはとても思えない、というものである。この内容から、相手の男性の文には図々しくも「ひと目お会いしたい」といった趣旨のことが書かれていたと推測されよう。

なお、詠歌事情に類似点があり、かつ「浅きころ」「思ひたえにき」という同じ歌句を用いた恋歌が同時代にあり、参考になる。

年ごろ物申しける人のたえておとづれざりければつかはしける  
読人不知

はやくより浅きころと見てしかば思ひたえにき山川の水

(金葉集・恋下・四七七)

たえにける男の、年ごろありて「みづから」などいひたり

けるが、おとせぬに、やらんとて人のこひし

一一二 ひとすらに思ひたえにし山川のなみづからとおどろかしけん

【校異】○をとろかしけん―おとろかれけん(松)

【現代語訳】訪れが絶えてしまった男が、数年を経て「私自身で訪問したいのですが」などと言ってきたが、その後音信がないので、その

男に送ろうということ、人が所望した歌

あなたに忘れられて私はあなたのことをすっかりあきらめたのに、どうしてあなたは、直接逢いたいなどと、便りを寄こしたのでしよう。

【語釈】○みづから 男が連絡してきた内容。手紙ではなく私自身で訪れたいの意。「みづから」は、自分自身で、親しくの意を表す副詞である。○おとせぬに 男から何の音沙汰もないので。○ひたすらに ただただ。もっぱら。流れ落ちる水に板を当て、音が鳴り響くようにしたものの意の「引板(ひた)」を掛けるか。↓【補説】。○思ひたえにし 「思ひたゆ」は、思うことをやめる、あきらめる意を表す。ここでは、「たえ」に山川の縁語「絶え」を掛ける。○山川 山を流れる川。「そこひなき淵やはさわく山川の浅き瀬にこそあだ波は立て」(古今集・恋四・七二二・素性)のように浅い流れとされたため、浅い心を連想させる。↓八〇。「思ひたゆ」という語とともに詠んだ同時代の例に、前の一一一番歌の【補説】に掲げた参考歌がある。○なみづからと 「自ら」に山川の縁語「水」を掛ける。○おどろかしけん 便りを送って関心を引く意の「おどろかし」に、引板や鳴子など、鳥獣を脅して農作物の被害を防ぐ道具の意の「おどろかし」を掛けるか。↓【補説】。

【補説】かつて深い仲になりながら訪れの絶えた男が、数年も経ってから自分自身で訪問したいという意志を告げてきた。にも関わらずその後の連絡はない。長年かけておさまりをつけた気持ちも今さらのようにならされて、なおも放置されたのであるから、女性にとってこれほ

どの侮辱はないだろう。不快に思った女性が、抗議の歌を堀河に依頼した、その代作歌である。一首のことば続きは、詠歌事情も類似する次の歌を念頭に置いていよう。

中納言平惟仲ひさしくありて消息して侍りける返事にかかせ侍りける  
高階成忠女

夢とのみ思ひなりにし世の中をなに今さらにおどろかすらん

(拾遺集・雑賀・二二〇六)

「ひたすらに」「おどろかしけん」に「引板」「おどろかし」を掛けていると見たい理由は、「あしひきの山田の引板のひたぶるに忘るる人をおどろかすかな」(古今和歌六帖・おどろかす・二八八六)に依拠したと思しい次のような作例が、同時代までに散見することである。

小山田のおどろかしにも来ざりしをいとひたぶるに逃げし君かな

(後撰・雑一・一一〇八・女の母)

ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかすかな

(詞花集・雑上・三三四・能因)

ひたぶるに山田の中に家居してすだく牡鹿をおどろかすかな

(堀河百首・田家・一五一六・永縁)

「山田」と「山川」、「ひたぶるに」と「ひたすらに」との違いはあるが、これらの作例の技巧に堀河が学んだ可能性は十分にあると思われる。試解として提示しておきたい。

一一三 あとたえてふるの野中のみづからとかけしにいとど濡るる袖

かな

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】

訪れが絶えて久しい今も、昔なじんだあなたが自分自身で訪問したい、などと私にことばをかけたために、いつそう涙で濡れる袖であることです。

【語釈】○あとたえて 人の足跡がなくなつて。転じて、人の訪れが絶えて。「絶え」は水の縁語。○ふるの野中 年月が経過する意の「経る」を「野中」に続けた表現。大和国の歌枕「布留」を掛けるか。参考「いそのかみふるの中道なかなか見ずは恋しと思はましやは」(古今集・恋四・六七九・紀貫之)。○野中のみづから 「野中の水」に「自ら」を掛ける。「野中の水」は「いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞくむ」(古今集・雑上・八八七・読人不知)により、昔の恋人を連想させる。「みづから」は「一一二」。○かけしに ことばをかける意の「かけ」に水の縁語「かけ」を掛ける。

【補説】詠歌事情は一一二番歌に同じ。同じ依頼に対して二首の歌を代作し、実際にどちらを用いるかは依頼者の女性に選ばせようとしたのであろう。昔の男に今さらのように「私自身で訪れたい」と言われ、なおも放置されたため、いつそう涙にくれる思いを詠じた一首である。

五月五日、たえにける男のがりやらむとて、人のこぶに

一一四 あやめ草かけても今はとはぬまにうきねばかりぞ絶えせざり

ける

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】五月五日、訪れが絶えてしまった男のもとに送ろうということで、ある人が歌を所望したので

今はもう、少しもあなたが訪れてくださらないので、つらさに声をあげて泣くことばかりが絶えないことですよ。

【語釈】○五月五日 端午の節句。この日に菖蒲を軒先に葺いたり身につけたりして、邪気をはらう風習があった。○あやめ草 菖蒲。

ここでは「懸けても」と同音の副詞「かけても」を導く枕詞。五月五日に送る歌であることから「あやめ草」を詠み込んだ。○かけても副詞「かけても」と「あやめ草を」懸けても」の掛詞。「かけても」

：打消「は、少しも……ない」の意。○とはぬま 「とはぬ間」にあやめ草の縁語「沼」を掛ける。類似の技巧を用いた歌に「あさまし

や見しふるさとのあやめ草わが知らぬまに生ひにけるかな」（金葉集・夏・一三四・輔仁親王）がある。○うきね つらい思いから発する

泣き声の意の「憂き音」に、あやめ草の縁語「泥根」（泥の中の根）を掛ける。「憂き寝」に「泥根」を掛ける類似の技巧を用いた歌に「隠れ

沼におふるあやめのうきねしてはてはつれなくなる心かな」（後拾遺集・雑一・八七一・斎宮女御）がある。

【補説】訪れが絶えた男に送る歌として、ある女性から堀河に依頼された代作歌である。絶えてほしくなかったあなたの訪れは絶えたが、

つらい思いゆえの泣き声のほうは絶えない。端午の節句の日に送る歌

にふさわしく、あやめ草の縁語をちりばめて相手を恨む思いを詠じた一首である。

離れたる男の、子を迎へたるに、そのちごのもとへ薬玉や

るとて人のよませし

一一五 引きかへて玉ぬきかけよあやめ草うきみこもりのなぐさめに

せん

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】疎遠になった男が、子を引き取ったので、その幼子のもとへ薬玉を送ろうということで、ある人が詠ませた歌

泥や水に隠れていたのとはうって変わって、美しい薬玉となったあやめ草を、あの子の身近に掛けてください。（私のもとで育ったこれま

での生活とはうって変って、あの子をどうか大切に育ててください。）わが子と離れて寂しく暮らすつらいわが身の慰めにしましょう。

【語釈】○離れたる男 関係が疎遠になった男。○子を迎へたるに女性との間の子を（男が）迎え取ったので。○薬玉 さまざまな香

料を玉の形をした袋に入れて菖蒲や蓬を結び、五色の糸を垂らしたものの。端午の節句に、邪気をはらうために帳台や柱などに掛ける。○

引きかへて 「引きかふ」は、状態・様子・名称などを、全く異なったさまにする意を表す。あやめ草の縁語「引き」を掛ける。参考「こ

もり江の汀のあやめ引きかへて玉のうてなにかかる今日かな」（久安百首・上西門院兵衛・夏・一一二五）。○玉ぬきかけよ 「玉ぬきかく」



は玉の穴に糸を通してつなく意。ここでは薬玉に菖蒲を結びつけ、人の身近に掛けることをいう。引き取ったわが子を、大切に育ててほしいという思いをこめる。○うきみこもり 「泥」(泥)や「水」に隠れること。ひっそり暮らすことの比喩として用いられる。「憂き身」を掛ける。

【補説】ある女性が男と疎遠になった。その後、男との間に生まれた子が、男に引き取られることになった。心の沈みがちな女性は、その子のもとに薬玉を贈ろうと思ひ、薬玉に添える歌を堀河に依頼した、その代作歌である。自分の贈った薬玉を、離れて暮らす子の身近に飾ってもらふことを、せめてもの慰めにしたいという母の心が歌われている。五月五日に送られた歌であろう。なお同時代の永縁に、宮仕えをしていた娘に五月五日に薬玉を贈った際に詠み添えた歌がある。

宮仕へしける娘のもとに五月五日薬玉つかはすとてよめる

権僧正永縁

あやめ草わが身のうきを引きかへてなべてならぬに生ひも出でな  
ん (金葉集・夏・一三二)

一首は、親の私のようにつらく濁った沼に居るのは違つて、人並み以上の沼で育つてほしいと、娘の今後の幸せを願つたものである。「あやめ草」「うき」「引きかへて」の語が当該歌と共通し、詠歌事情も込められた心情も類似している。当該歌は、この永縁詠を念頭に置いた可能性が高いと思われる。

男の「鏡のかけ変はりぬ」などいひたりける返事にかは  
りて

一一六 変はるらむうたがはしさぞますかのみ心もかくやあらむと思  
へば

【校異】○いひたりける―いひたりけるに(松) ○かはりて―うた  
かく(松)

【現代語訳】男が「鏡に映る面影が変わってしまった」などと言つてきた返事に、代わつて詠んだ歌

おっしゃる通りあなたの面影は変わつていふことでしょうか。それにつけても疑わしきが増すことですね。あなたの心もそのように変わつたでしょうかと思うと。

【語釈】○鏡のかけ変はりぬ 鏡に映る自分の顔かたちが変わつてしまった。男が女性に言つて寄こした音信の内容。女性の気を引くために「あなたに恋い焦がれるあまりに、私はやつれて顔形が変わつてしまった」と伝えたいのであろう。○ますかがみ 「真澄鏡(まさかがみ)」の転。澄み切つた鏡。ここでは「疑はしさが」増す」を掛ける。

【補説】ある男が女性に「鏡に映る面影が変わってしまった」と言つてきたため、女性は返事の歌を堀河に依頼した、その代作歌である。男の音信の内容を踏まえつつ、「そんなことでは、私を思う心の方も変わったのでしょうか」と切り返した一首。

今は逢ふまじきよしとまたこへば

一一七 うらみわびつきせぬ物は涙かな逢ひみむことはかぎりと思

ふに

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】今はもう逢わないつもりであることを告げる歌、とまた人が所望するので

恨み続けることに疲れ、尽きることがないものは涙であるなあ。あなたと逢うことはもうこれからはないと思うのに。

【語釈】○うらみわび 恨み続けることに疲れ、恨めしい気持ちに

堪えかねるの意。「うらみわび干きぬ袖だにあるものを恋に朽ちなんん名こそ惜しけれ」（後拾遺集・恋四・八一五・相模）。○つきせぬ物は

涙かな 「瀬をはやみ絶えず流るる水よりもつきせぬ物は涙なりけり」

（拾遺集・恋五・九六四・読人不知）など、類似のことば続きが同時代までの和歌にしばしば見られる。○逢ひみむこと 男女が契りを

結ぶこと。「夢のうちに逢ひみむことを頼みつづくらせる宵は寝む方もなし」（古今集・恋一・五二五・読人不知）。○かぎりと思ふに 「か

ぎり」は最後。逢うことはすでに終わっている、もう逢わないという気持ちを表している。

【補説】一一六番歌で堀河に代作を依頼した女性が、また代作の依頼をしたので詠んだ歌。今度は、男女の関係を終わらせたいという意志を告げる歌である。逢瀬を交わすことはもうなくなつたが、尽きないものは涙であるという趣向が一首の眼目である。「かぎりぞと思ふにつ

きぬ涙かなおさふる袖も朽ちぬばかりに」（後拾遺集・恋四・八二八・盛少将）を念頭に置いてみようか。一〇九番歌からこまで、他の女性からの依頼に応じて詠じた代作歌が並ぶ。専門歌人、また女性歌人としての堀河の面目躍如たる歌群と言えよう。

仁和寺殿に九月行幸ありて競馬ありしに、新院位の御

時 菊千秋を契る

一一八 続古雲のうへの星かと思ゆる菊なればそらにぞ千代の秋は知らるる

【校異】○くらへむまーくらへ事（松） ○そらにそちよのーそらにも千世の（松）

【現代語訳】仁和寺殿に、九月、行幸があつて競馬が行われた時、それは新院の御在位中であつたが、菊千秋を契るという題で詠んだ歌

雲の上の星かと思紛う菊なので、千年の秋に渡つて続いてゆく御代のほどがおのずと知られることです。

【他出】

○『続古今集』賀・一八八〇

崇徳院の御時法金剛院に行幸ありて、菊契千秋といふことを講  
ぜられ侍りけるに 待賢門院堀河

くものうへのほしかとみゆるきくなればそらにぞちよの秋はしらるる

【語釈】○仁和寺殿 真言宗御室派の総本山、仁和寺。ここでは仁和

寺の寺域に建立された待賢門院の御願寺、法金剛院をさす。○九月

行幸ありて 保延三年（一一三七）九月の、崇徳天皇の仁和寺への行

幸を言う。競馬ののち歌会が催された。↓【補説】。○競馬 馬を走

らせて勝負を争う競技。五月五日に宮中や上賀茂社で行われるものが

著名であるが、『栄花物語』巻二十三「こまくらへの行幸」には、万寿

元年（一一〇二四）九月に後一条天皇、上東門院、東宮（後朱雀天皇）

の行幸啓のもと、藤原頼通の高陽院で行われた競馬のさまが活写され

ている。○新院位の御時 崇徳院の御在位の時。○菊千秋を契る

競馬ののちに行われた歌会の歌題。菊の花が千年の秋の繁栄を約束す

るの意。「露ながら折りてかささむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」

（古今集・秋下・二七〇・紀友則）のように、菊または菊の露は不老

長寿を約束するものとして歌われた。もとは漢詩文に見られる表現。

○雲のうへの星かと思ゆる菊 「久方の雲のうへにて見る菊は天つ星

とぞあやまたれける」（古今集・秋下・二六九・藤原敏行）を踏まえる。

「雲のうへ」は宮中、またはそれに準ずる高貴な場所を暗示する。菊

を星に見立てる発想も漢詩文に由来するものである。○そらにぞ千

代の秋は知らるる 「そらに知る」は、何となく感知される。「雲」「星

の縁語「空」を掛ける。

【補説】森本元子氏「院政期の女流歌人―特に待賢門院堀河とその家  
集―」（風間書房、『講座平安文学論究』第三卷、昭和六一年）が指摘  
する通り、『中右記』保延三年（一一三七）九月二十三日条に「丑刻  
有<sub>三</sub>行幸<sub>二</sub>院御所仁和寺法金剛院<sub>一</sub>競馬」、同二十五日条に「入<sub>レ</sub>夜和歌、

菊契<sub>三</sub>千秋<sub>一</sub>、序代按察大納言、及<sub>二</sub>暁更<sub>一</sub>還御」の記事がある。『百鍊  
抄』同二十三日条によると競馬は十番で、鳥羽上皇、待賢門院も臨幸  
したという。堀河は待賢門院に従つて競馬を見、二十五日の歌会にお  
いて当該歌を詠んだものと思われる。

なお同じ折の詠と思われる藤原忠通、源有仁、藤原実行の歌が『千  
載集』に入集する。ただし『千載集』詞書では行幸の年次を「保延二  
年」とする。待賢門院の兄である藤原実行は保延三年（一一三七）当  
時権大納言にして按察使を兼ね、先の『中右記』の引用文中に「按察  
大納言」として名が見える通り、この歌会の序も献じたようである。

保延二年法金剛院に行幸ありて、菊契多秋といへるころを  
よませ給うけるに、よみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしも白菊の咲くや千歳のしるしなるらん

花蘭左大臣

八重菊のほふにしるし君が代は千歳の秋をかさぬべしとは

八条前太政大臣

ちはやぶる神代のことも人ならば問はましものを白菊の花

（千載集・賀・六一九・六二〇・六二一）

ほか、同じ折の詠と思われるものとして藤原公能の歌が『新拾遺集』  
（秋下・五二一・大炊御門右大臣）に、藤原公教の歌が同集（賀・七  
一七・三条内大臣）に入集している。

これらの歌の多くは、不老長寿の象徴である菊に寄せて待賢門院の

長寿を寿いだものである。当該歌はさらに、菊を「雲の上の星」に見立てる技巧、また「雲の上の星」の縁で「そらに知る」という表現を詠み込む趣向を加えている。

月

一一九同はかなくも月に心のとまるかなすみはつまじきこの世と思

ふに

【校異】○集付一ナシ(松) ○この世と思ふに―底本「この世と思ふに」。「この世とおもふに」(松)、身をは忘れて(群)

【現代語訳】月

むなしくも月に心が惹かれ、とどまることだなあ。いつまでも住み遂げることはできないこの世と思うのに。

【他出】

○『続古今集』哀傷・一四二五

つきを見てよめる

待賢門院堀河

はかなくもつきにころのとまるかなすみはつまじき身をばわすれて

【語釈】○はかなくも たしかな結果が得られるあてもなしに。むなししいことに。一首の発想とことば続きは本集も収載する堀河自身の詠「はかなくもこれを旅寝と思ふかないづくも仮の宿とこそ聞け」(久安百首・羈旅・一〇九八)に似る。↓八九。○月に心のとまるかな月に心が惹きつけられ、そのままとどまることだなあ。ことば続きは「青

葉さへ見れば心のとまるかな散りにし花のなごり思へば」(山家集・一五八)に似る。○すみはつまじき 「住み果つ」は、最後まで住み続ける。月の縁語「澄み」を掛ける。また「とまる」と「すみはつまじき」とで意味を対比させる。

【補説】人の命には限りがあり、いつまでもこの世にとどまり続けることはできないのに、心は月に執着し続けようとする矛盾を歌う。『久安百首』における作者堀河の妹、上西門院兵衛の作「いく世しすみはつまじき世の中に月に心をなにとどむらむ」(久安百首・秋・一一四四)と酷似しており、影響関係が想定されよう。

具ぐしたる人のなくなりたるを嘆なげくに、幼おきなき人の物語ものがたりするに

一一二〇 いふかたもなくこそ物は悲かなしけれこは何事なにとを語るかたなるらむ

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】連れ添っていた人が亡くなったのを嘆いている時に、幼い子が何やらしゃべっているのだ。言いいようもないほど悲しいことだ。それなのにこれはまあ、わが子は何事をつぶやいているのだろうか。

【語釈】○具ぐしたる人 作者堀河の夫。○幼おきなき人 幼児。亡なき夫と堀河との間の子である。○物語ものがたりする 乳児などが意味のないおしゃべりする。「この君五十日のほどになり給ひて、いと白ううつくしう、ほどよりはおよすけて、物語などし給ふ」(源氏物語・柏木)。○

こは何事を語るなるらむ 「此」に「子は」を掛ける。哀傷歌ではなく、掛詞も用いてはいないが、類似の歌句を持つ同時代の歌に「あさましやこは何事のさまぞとよ恋せよとても生まれざりけり」（金葉集・恋下・五一五・源俊賴）がある。

【補説】夫が死に、自分は言いようもないほど悲しんでいるのに、子どもは何かを言っている、という切ない対比を歌った一首。夫を失った時期の歌でありながら、専門歌人の歌らしく当意即妙の趣向が光る。この歌により、堀河に夫と子があつたこと、夫は子が幼い頃に死んだことが知られる。なお森本元子氏前掲論文は、『新千載集』に入集する次の贈答歌を引き、父の顕仲のもとで養っていたこの幼児が堀河の産んだ子である可能性を指摘している。

子日にあたりたりける日、神祇伯顕仲もとに養ひたりけるち  
このもとへ申しつかはしける 待賢門院堀河

いざ今日は子の日の松を引きつれて老木の千代をとものにいのらん  
返し 神祇伯顕仲

いのるとも老木の松は朽ちはてていかでか千代をすぐべかるらむ  
(新千載集・雑上・一六六五—一六六六)

よろづの人のなくなるを聞きて

一二二 おくれるて涙さへこそとどまらね見しも聞きしも残りなき  
世に

【校異】○集付—玉葉（群）

【現代語訳】多くの人が亡くなるのを聞いて

人々に先立たれて、涙までがとどまらないことだ。親しかった人も話に聞いていた人も、残り少なくなったこの世に。

【他出】

○『玉葉集』雑四・二三五二

人のおほくなくなるをききて

待賢門院堀河

おくれるて涙さへこそとどまらね見しもききしも残りなき世に  
【語釈】○おくれるて 人に先立たれた状態で。後に生き残っていて。

○涙さへこそとどまらね 涙までもが流れ続け、とどまることがないことだ。↓【補説】。○見しも聞きしも 顔を合わせ親しい間柄だった人も、話に聞いていただけの人も。「すぐすぐと見しも聞きしもなくなる

なるにいつならんとぞ我も悲しき」（古今和歌六帖・かなしび・二四九二）を念頭に置く。同時代の藤原清輔にも同じ句を用いた哀傷歌がある。「花蘭左大臣北方うせられにける頃、母の思ひにて侍るを、そのわたりなる人のとへりければよめる／世の中は見しも聞きしもはかなくてむなしき空の煙なりけり」（清輔集・三四〇／新古今集・哀傷・八三〇）。

【補説】多くの人が亡くなるのを耳にした時期に詠んだ歌。さまざまの人が世にとどまらず去っていったばかりでなく、生き残ったわが身の涙までもがとどまらない、というのが一首の眼目である。なお、同じ第二・三句を持つ歌が『堀河百首』にある。

心なる涙さへこそとどまらね今年はけふを限りと思へば

(堀河百首・除夜・一一二〇・河内)

とどまることのない時の流れのために一年の最後の日を迎えたことを思うと、心のうちの涙までもがとどまらないと、歳末の慨嘆を歌ったものである。この河内詠は哀傷歌ではないが、当該歌との影響関係が想定されよう。

(かとうむつみ 本学教授)

(まつもとまなみ 尚綱学院大学教授)